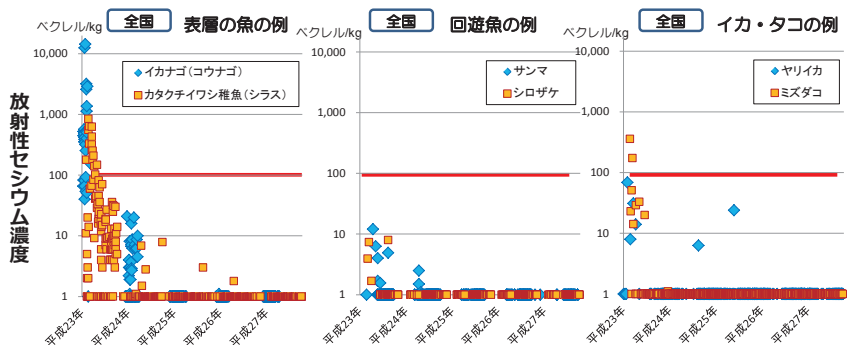


魚種別の放射性セシウム濃度の傾向 (1/2)

- シラス等の表層魚：時間の経過と共に基準値を下回る
- 回遊魚、イカ・タコ、エビ・カニ、海藻類：基準値を下回る
- カレイ等の底魚：現在でも基準値を上回る魚種が存在する
→ 生息域の環境や食性等が品目ごとの傾向に関係



(注) 平成23年3月24日～平成27年12月31日までの検査結果を水産庁にて集計。

農林水産省「農林水産現場における対応」より作成

農林水産省

生息域の環境や食性の異なる魚種の放射性セシウム濃度の検査結果を紹介します。

コウナゴやシラス等の海面近くに生息している魚は、東京電力福島第一原子力発電所事故直後には高い値が見られましたが、現在では全てが基準値以下となっています。

サンマ、シロザケ等の海を広く回遊する魚は、事故直後であっても100ベクレル/kgを超えるものはなく、50ベクレル/kgの値も見られません。

一方、一部のカレイ類等の海底近くに生息する魚の中には、現在でも一部の海域で基準値を上回る検体が検出される魚種が存在しますが、その頻度はかなり低下しています。

また、イカ・タコ類等の海産無せきつ動物は、事故直後には高い値が見られましたが、表層の魚より速やかに濃度が低下し、現在では50ベクレル/kg超の値も見られていません。これは、海産無せきつ動物では塩類が海水と体の中を自由に行き来するため、海水中の放射性セシウム濃度が低下すると、速やかに体内の濃度も低下するためと考えられます。

このように、生息域の環境や食性等が品目ごとの放射性セシウム濃度の傾向に関係することがこれまでの調査結果から示されています。

河川等に生息する内水面の魚種の放射性セシウム濃度は、区域によっては基準値を超えています。養殖のものは、全て基準値以下となっています。

本資料への収録日：平成25年3月31日

改訂日：平成28年1月18日